



cope 2018 年

北海道地震ボランティア

応援基金

-報告書-

2025.3

認定 NPO 法人北海道 NPO ファンド





## はじめに

北海道生活協同組合連合会 専務理事 平照治

2018年9月6日、北海道胆振東部を襲った地震は、北海道全域のブラックアウト（大規模停電）を引き起こす等甚大な被害をもたらしました。多くの尊い命が失われ、家屋や生活基盤が大きく損壊されました。この地震発生直後から、全国各地の生協組合員から温かい支援の輪が広がり、被災者の方々の生活再建を支援するために、約3.6億円もの多大な支援募金が寄せられました。

多くは義捐金や農業生産者への支援金としてお渡しさせていただきましたが、900万円を被災地で継続的に活動するNPOやボランティア団体等を支援する「コープ2018年北海道地震ボランティア応援基金」として北海道NPOファンドに創設し、のべ27団体への助成に活用いただきました。

昨今の大規模地震災害からの復興の長期化を見るにつけ、被災地の活性化や被災者ケア・仮設住宅入居者等への継続的な見守り支援活動が重要になっています。

申請頂いた活動は、地域づくりや復興支援・高齢者の見守り、こどもや災害弱者の居場所づくりなど多岐に渡りました。

この基金に申請いただいた団体の皆様に感謝申し上げますとともに、支援募金にご協力頂いた全国の生協組合員の皆様に深く感謝を申し上げます。

平成30年北海道胆振東部地震は、私たちに大きな教訓を教えてくれました。自然災害の脅威は常に存在し、いつどこで被災してもおかしくないという現実を突きつけられました。

しかし、同時に私たちは、温かい支援の力も実感しました。全国各地から寄せられた支援募金は、被災者の方々に大きな希望を与えました。

私たちは、この経験を教訓として、今後とも大規模災害における支援活動に取り組んでまいります。

この基金報告書が、被災地の支援活動の成果を広くご理解いただく機会となれば幸いです。

# 目次

## はじめに

コープ 2018 年北海道地震ボランティア応援基金の全体像 ..... 1

助成実施団体一覧 ..... 3

活動報告 ..... 6

採択団体インタビュー 助成事業を終えて ..... 35

　NPO 法人とあさ村 青木明子さん ..... 35

　オフィス・アップロード 上道和恵さん ..... 39

寄稿 ..... 45

　「コープ基金の立ち上げを振り返って」元北海道 NPO サポートセンター職員／札幌市議会議員 定森光 ..... 45

　「コープ 2018 年北海道地震ボランティア応援基金」福祉 NPO 支援ネット北海道代表理事／山本純子（選定委員） ..... 47

基金の基礎情報 ..... 49

基金の設計 ..... 50

　基金としての目標 ..... 50

　セオリーオブチェンジ ..... 51

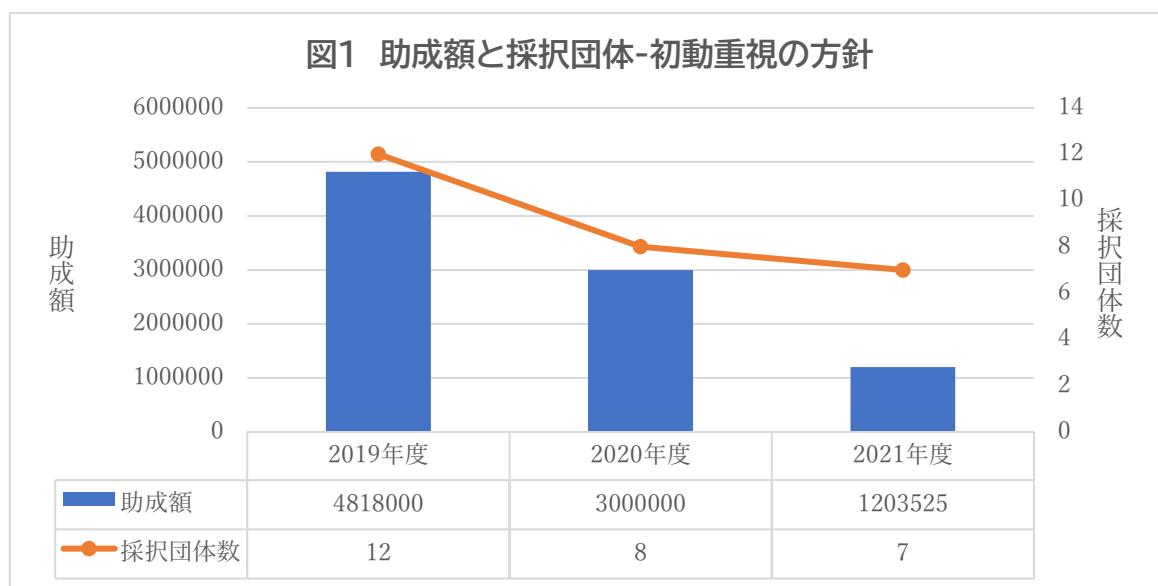
コープ 2018 年北海道地震ボランティア応援基金のプログラム評価 ..... 52

コープ 2018 年北海道地震ボランティア応援基金の助成を振り返って ..... 53

## cope 2018年北海道地震ボランティア応援基金の全体像

本助成では、3年間でおよそ900万円の助成を行いました。方針として、被災三町(厚真、安平、むかわ)における活動を募り、全国規模の支援団体が撤収した後の住民の自治による復興の一助となることを目指しました。3年間で被災地支援に取り組んだ団体は延べ27団体でした。

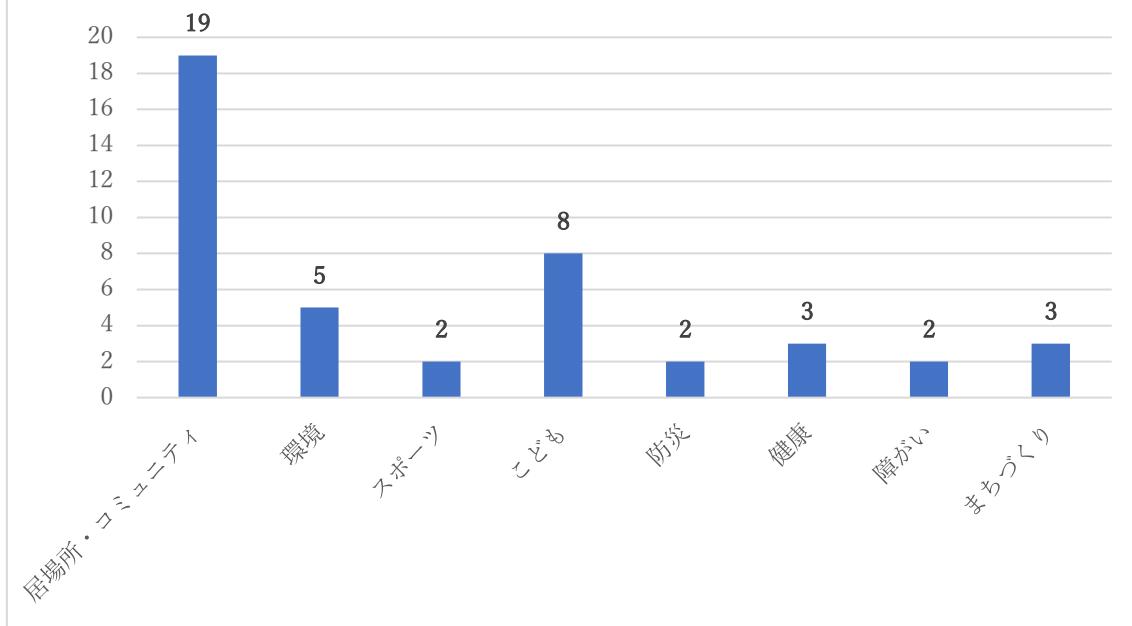
900万円のうち初年度に480万円の助成を行い、被災地支援の必要性の高い初期において多額の助成金を支出しました。(図1参照)



主な活動町村について見ると、厚真町13、安平町12、むかわ3(採択団体の重複あり)となりました。2年目までにむかわ町における活動がありました。3年目にはゼロとなり、助成情報を申請したいという気持ちを持った方や、団体に情報を届けることが我々としての課題として残りました。

次に、採択団体の報告書を8つの活動分野に分けて集計したものが図2です。居場所・コミュニティと分類した、人が集まり、交流する働きを持った活動が最も多い、次に子どもに関わる活動、そして自然環境の復旧など環境分野が続きました。3年目に入り防災と分類される活動が2つあったことも注目されます。

図2 コープ北海道地震ボランティア応援基金  
活動分野(重複あり)「居場所×●●」



多くの活動は、居場所づくり・コミュニティ活性化と、健康づくりや子どもの体験活動、障がい者支援、防災活動などを組み合わせたものでした。

被災地支援における「居場所・コミュニティ」の活性化と、各支援団体の長所、強みの組み合わせ、あるいは、地域における喫緊のニーズへの対応との組み合わせが行われている、そのような姿が垣間見えます。

次項に、2019年からの助成実施団体一覧を載せます。

## 助成実施団体一覧

年度	コース	団体名	活動名
2019	A	NPO 法人はやきた子どもの遊び場づくりネットワーク	震災で崩れた「北進の森」植林による復旧事業
2019	A	NPO 法人薔薇香る癒しのまち岩見沢	コミュニティカフェ ぼらカフェ運営事業
2019	A	NPO 法人いぶり自然学校	馬と親子による地滑り山林の整備と整備後の搬出財・フィールドの利活用推進事業
2019	A	いのちをつなぐチャリティマルシェ	「あびら☆うたごはん」及び「あびら☆援農活動」
2019	A	あびらや・らび～あ	HONEBONE コンサートおよびオクラホマライブ
2019	A	カフェデモンクえりも	カフェデモンえりもネットワーク平成 30 年度北海道胆振東部地震災害支援活動
2019	A	NPO 法人日本ノルディックウォーキング学校	平成 30 年北海道胆振東部地震健康生活支援事業～ポールで歩こう、みんなで歩もう胆振東部地震からの復興～
2019	A	追分イーグルス	室内野球練習場(ハウス)設営
2019	B	支え合い共に生きる会	「みんなの茶店」修繕事業
2019	B	一般社団法人北海道ブックシェアリング	むかわ町穂別図書館再開支援事業

2019	B	オレンジたすきで繋ぐ 「ippo」	仮設住宅に花を
2019	B	NPO 法人アグリコミュニティ千歳	大地震の復興に向けての 原風景再興と新ビジネス 創出の事業
2020	A	NPO 法人とあさ村	コミュニティサロン「み んなの家」運営事業
2020	A	NPO 法人あつま森林むすび の会	厚真町の森林における自 然体験教育活動推進事業
2020	A	一般社団法人安平町復興 ボランティアセンター	コミュニティスペース 「ENTRANCE」拠点環境改 善事業
2020	B	オレンジたすきで繋ぐ ippo	仮設住宅に花を
2020	B	厚真手話の会てのひら	手話に親しもう！
2020	B	あつまっぷる	体操教室の開催
2020	B	Office あっぷ・ろーど	中学生・高校生のための サードプレイス 『Light House』
2020	B	あつま森のようちえんワ ッカ	親子での自然体験活動
2021	-	オレンジたすきで繋ぐ 「ippo」	「ippo」（仮称）～防災 から発後、おすそ分けの 支援体制のプラットフォ ーム～
2021	-	Office あっぷ・ろーど	『ぼくらのまちづくり - 自主学習会 Light House-』
2021	-	NPO 法人とあさ村	コミュニティサロン「み んなの家」運営事業
2021	-	あつまっぷる	体操教室

2021	-	おはなしのびっ子	親子で楽しめる読み聞かせイベント in 厚真町文化祭・図書フェスティバル
2022	コロナによる延長	NPO 法人アビースポーツクラブ	スポーツ探検隊
2022	コロナによる延長	NPO 法人ポラーナ	馬でゴミ回収コミュニティづくり

## 活動報告

助成年度	2019 A コース
団体名	NPO 法人はやきた子どもの遊び場づくりネットワーク
事業名	震災で崩れた「北進の森」植林による復旧事業
事業概要	胆振東部地震によって、管理運営をしている森が大きく崩壊した。大きく3箇所あった中、その1つを抽出し、その地を植林することにした。目的は、崩れた森を再生するにあたって、「人間の力」を取り入れることで、森の再生と地震を受けた人々が共に元気になっていきたい、そんな趣旨をもって着手。植林という無知の中、各方面の専門家の知恵と力を拝借しながらプロジェクトとして進めることになり、そのプロジェクトに関わる諸費用を今回の助成金で充てさせていただいた。また作業にかかる備品購入にも使用させていただいた。
助成を受けて	当事業を実施するにあたって、まず、北海道大学農学部森林生態学研究室の監修のもと、植林を通しての森づくりを進めることができた。また、震災で出たレガシーなどをフル活用し、土留め等、専門的な力を持っている NPO 法人いぶり自然学校の多大なる協力を得て作業の土壤を作っていただいた。その後土留めづくりの人工に関しては、作業量はかなりあったものの、当時の災害ボランティアで協力してくれた方々が手伝ってくれて達成できた。春先に植える苗木も準備でき、春先に植林・鹿柵を設置できる状態となった。

### ■活動写真

森のレガシーを使って土留めを作った様子



助成年度	2019 Aコース
団体名	NPO 法人薔薇香る癒しのまち岩見沢
事業名	コミュニティカフェ ぼらカフェ運営事業
事業概要	2018年10月から、厚真町において、ボランティア、被災地域住民、スタッフの交流、各団体の受け入れ、情報発信や交換を目的にしたぼらカフェを運営してきた。ぼらカフェは、足湯、せんべい焼き、たこ焼き、チエロコンサートなど多岐にわたる団体との連携が実現してきた。住民の要望に応え今年度も同様の活動を行う。
助成を受けて	厚真町災害ボランティアセンターにおいて地域住民、ボランティア、スタッフの交流、各団体の受け入れ、情報発信・交換を目的にコミュニティカフェ、ハンドクラフト活動を実施しました。今年度は全5回開催、厚真町社協、厚真町災害VCによるチラシの全戸配布、北海道災害復旧復興支援ボランティアによるポスティングの協力により、1000人を超える皆さんの利用がありました。カフェにおいて新しく食事の提供を開始。地域住民、子どもたちの運営サポーターも増加しました。連携イベントも活発になり、道内よさこい団体による演舞、福祉団体によるピアノ演奏会、そば打ちサークルによる体験・試食が実施され賑やかな一日となり、多世代交流が生まれ、あたたかな笑顔の輪が一段と広がった活動に繋がりました。 2020年2月、3月はコロナウイルス感染拡大防止のため緊急休止

#### ■活動写真

##### ぼらカフェの様子



助成年度	2019 A コース
団体名	NPO 法人いぶり自然学校
事業名	馬と親子による地滑り山林の整備と整備後の搬出財・フィールドの利活用推進事業
事業概要	地震によって地滑りを起こしてしまった各地域の里山エリア（安平町北進の森奥）において、そのフィールドの整備を進めるために、特に胆振管内で古くから実施されてきた馬による整備（馬搬）を用いた整備を行った。合わせて、地滑りを起こした斜面における播種促進および天然更新を促進するために、地滑り斜面の基礎調査と倒木を活用した土留材の作成および設置を行った。また、その整備プロセスを多くの子ども、あるいは親子、あるいはボランティアツーリストによる整備を進め、地滑りを起こした場所の再生する様子を観察するジオパーク手法を用いた森林再生につなげるための体制を構築すべく、関係者との会議やモデルプログラムを実施した。
助成を受けて	当初、安平だけではなく厚真・むかわでの活動も計画していたが、予算の削減、私たちが到底対応し切れない範囲と規模のエリアとなってしまったこと、思った以上に安平のフィールド整備に時間がかかること、を勘案し、安平のみに絞った活動を展開することになった。その分、地域関係者や地元ボランティア、子どもたちの前に数多く出ることとなり、そのプロセスを共有できる場面を多く創出できたことは大きな成果であると言える。また、馬搬についても地元の若手スタッフがそのほとんどを担うこととなり、専門家の指導を受けながら、一定の成果を上げることができたことは、技能の向上と持続性が高めることにつながったと考えられる。

### ■活動写真

馬搬専門家による理論研修



助成年度	2019 Aコース
団体名	いのちをつなぐチャリティマルシェ
事業名	「あびら☆うたごはん」及び「あびら☆援農活動」
事業概要	「あびら☆うたごはん」は安平町仮設住宅談話室で入居者を対象とした昼食会及び音楽演奏の開催する。食事と音楽を通じて入居者が集い、一息つける機会としたい。「あびら☆援農活動」は被災した農業者のニーズを聞き取り、ビニルハウス設営など農作業の補助をする。震災の復旧作業と人手不足で営農作業が困難な農家の生活再建の一助となりたい。
助成を受けて	安平町でのボランティア活動の参加者は札幌など遠隔地に住む人や学生が多いため、交通費の心配なく参加してもらえたことで活動が持続でき、仮設住宅の入居者の方々や農家さんにも喜んでいただいた。「あびら☆うたごはん」では仮設住宅の入居者の方がギターを弾いたり、次の歌やメニューをリクエストしたりするなど、楽しみにしてくれていた。今後も同様の活動を地道に継続していきたい。

### ■活動写真

第10回「あびら☆うたごはん」2019/10/15、歌のあとでのタコスパーティ



助成年度	2019 Aコース
団体名	あびらや・らび~あ
事業名	HONEBONE コンサートおよびオクラホマライブ
事業概要	<p>フォークデュオによるコンサート、北海道のローカルタレントのお笑いライブを安平町で開催する。震災により心にダメージを受けた町民を励まし元気づけることを目的とする。</p> <p>1. HONE BONE (ホネボーン) の音楽ライブの開催 2019年9月21日（土）追分公民館 来客数 200名 圧倒的な歌唱力のエミリーさんの唄声に魅了された。事前に安平町民にアンケートを実施した。そのアンケートをもとに新曲「当たり前に」を披露していただいた。</p> <p>2. オクラホマの河野真也氏講演会 10月13日（日）はやきたこども園 来客 50名 講題”子育ていろいろあるよね～イラっときたら笑えるチャンス” 相方の藤尾さんの失敗談で笑い、子育ての話にほろりとした。</p>
助成を受けて	<p>胆振東部地震から一年が過ぎました。この一年、各方面からたくさんのご支援をいただきました。町民ひとりひとりも復興に向けて頑張っていますので、その頑張る人たちを応援したいと思い、町民が元気になるようなイベントを企画しました。</p> <p>北海道NPOファンドさんの助成金により目的を達成することができました。ありがとうございました。</p>

### ■活動写真

2019年10月13日（日）オクラホマ河野真也氏講演会



助成年度	2019 A コース
団体名	カフェデモンクえりも
事業名	カフェデモンえりもネットワーク平成 30 年度北海道胆振東部地震災害支援活動
事業概要	被災地住民が未来に向かって歩みだす力の一部となることを目指し、サロン活動、運動教室、ボランティア派遣、復興支援イベントを開催する。
助成を受けて	<ul style="list-style-type: none"> <li>・豊川地区サロン、福祉センターサロンはそれぞれ月 1 回の頻度で行つた。精神保健福祉士、看護師、傾聴ボランティア、宗教者らが参加した。</li> <li>・本郷地区仮設住宅での運動教室では主に看護師のボランティア派遣を行い、健康チェックや心のケアに取り組み、食事会も 1 度開催した。</li> <li>・イベントとしては、吉野地区での宗教家による供養会、厚真町災害ボランティアセンターにて 1 年の集い、町民を浦河町に招いての稲刈りイベントを実施した。</li> </ul>

### ■活動写真

豊川地区サロンの様子



助成年度	2019 Aコース
団体名	NPO 法人日本ノルディックウォーキング学校
事業名	平成 30 年北海道胆振東部地震健康生活支援事業～ポールで歩こう、みんなで歩もう胆振東部地震からの復興～
事業概要	ノルディックウォーキングの有資格者を中心に、厚真、安平、むかわの仮設住宅を中心に、ノルディックウォーキング・ポールストレッチング講座、お茶会を開催し、入居者の健康生活を支援する。
助成を受けて	東日本大震災における支援活動で学んだ実績・経験を次の震災のために伝承する活動として取り組んだ。また、突然起きる災害後の避難所で起きる健康被害、特に生命や人権を脅かす「エコノミークラス症候群の解消」「ひとり暮らしや知らない人々との共同生活からくる不安、孤立化」などストレスの軽減を図るために運動としての取り組みをした。狭い仮設住宅で暮らすことによる運動不足の解消、仮設住宅内のコミュニティの形成、ひとり暮らしの孤立化の予防、行政、仮設住宅自治会などと支援活動実施のための仕組づくりとその検証、講習会終了後の地元での指導者養成やパンフレット配布により、自立して運動する習慣化の必要性を訴えた。

#### ■活動写真

むかわ町支援ボランティア初日



助成年度	2019 A コース
団体名	追分イーグルス
事業名	室内野球練習場(ハウス)設営
事業概要	北海道胆振東部地震災害によるグラウンドや体育館・スポーツセンター等の損害を受け、当団体を含めた町全体のスポーツ少年団や部活動が練習場所の確保に困難を極めているなか、その打開策としてビニールハウス型の室内練習場の設営を目指す。
助成を受けて	令和1年11月 土地整備・ハウス部材購入 令和1年11月～12月 ハウス設営 令和2年1月 備品搬入・電気工事等 令和2年2月 ハウス完成・練習開始 助成金に加え、クラウドファンディングなども行って完成。

■活動写真

ハウス説明作業の様子



助成年度	2019 B コース
団体名	支え合い共に生きる会
事業名	「みんなの茶店」修繕事業
事業概要	むかわ町のイベント手伝い、ふれあい喫茶を行う「みんなの茶店」は、地震後テーブル、いすに破損があり、修繕と交換が必要になった。
助成を受けて	今回の助成金で茶店の雰囲気をどうしたらよいか、利用される方がゆっくりできる空間をということで、今までの食卓テーブルからコーナーのソファを設置することで意見がまとまった。茶店自体の床が段差があるなど条件が厳しいなか、ソファを選ぶのに時間を要しましたが、設置し利用される方の評判は、ゆっくり会話できて落ち着けるという話が聞かれ、購入してよかったですと感じている。色々な講座が開催しやすくなり、震災後、独居の方、家族と同居の方もスタッフ、利用者の方となじみの関係を築けていて、日常生活の一部となっているという話を聞く。今後は高齢者、障がい者、子育て世代など色々な方が集える場所を提供してきたい。

#### ■活動写真

コーナーソファにして初めて来たお客さま



助成年度	2019 B コース
団体名	一般社団法人北海道ブックシェアリング
事業名	むかわ町穂別図書館再開支援事業
事業概要	北海道胆振東部地震で深刻な被害を受けたむかわ町穂別図書館の通常開館に向けた支援および開館後のサポートを実施していく。ボランティアスタッフが備品の再生・整備、書架への配本、装飾などを実施するほか、必要とされる書籍の提供を実施していく
助成を受けて	ヒアリングを重ね、担当者から要望を聞き取ったうえで以下の支援を実施した①汚損した図書やカビ菌の恐れのある図書の保全のため書籍除菌機の貸与を実施②東京の支援団体との接続により館の希望図書を提供③ボランティア6名により開館に向けた館内装飾や什器等の整備を実施

■活動写真

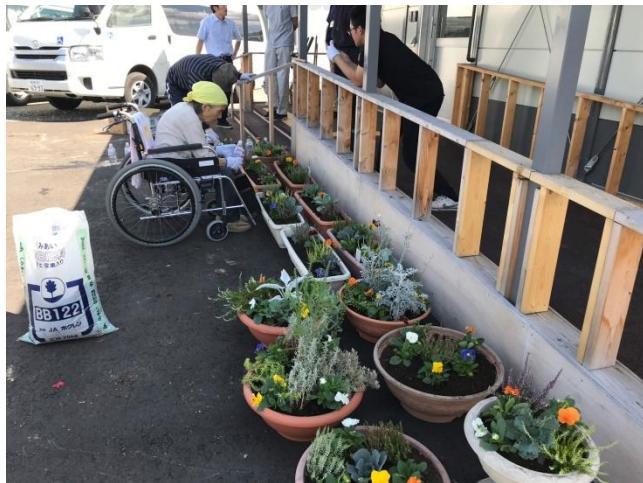
椅子のやすりがけと再塗装



助成年度	2019 B コース
団体名	オレンジたすきで繋ぐ「ippo」
事業名	仮設住宅に花を
事業概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>・4/10より鉢植えの花を希望者の玄関、ベランダに置かせて頂いてます。</li> <li>・7月より暑さ対策で、すだれの設置</li> <li>・風除室への網戸設置により、風通しを良く環境改善</li> <li>・秋まで持つようにと、花の植え替え。</li> <li>・9月3日、福祉仮設住宅へのプランターの設置</li> </ul> <p>仮設住宅の談話室への鉢植えの設置。</p>
助成を受けて	町内の花フレンズさんの協力により、プランター、鉢、土の無料提供、梅原商店さんの値引きにより、花の植え替えや談話室への設置、福祉仮設住宅への花、プランターの設置が出来た。一から全て購入し全面設置だと、絶対に今回の助成金では無理だった。必要なお宅に設置したので、花も元気で皆さんに喜ばれていた。

### ■活動写真

#### 福祉仮設住宅設置



助成年度	2019 B コース
団体名	NPO 法人アグリコミュニティ千歳
事業名	大地震の復興に向けての原風景再興と新ビジネス創出の事業
事業概要	自治体・教育機関、住民・学生との協働で、千歳市と厚真町において、復興に向けて勇払原野の原風景をイメージする「ハスカップの郷」をつくる。

### ■活動写真

ハスカップ農園での摘み取り作業手伝い



助成年度	2020 Aコース
団体名	NPO 法人とあさ村
事業名	コミュニティサロン「みんなの家」運営事業
事業概要	<p>会の拠点である「みんなの家」に障害のある方の避難所機能を整備し、コミュニティカフェを毎週1回運営、そして年1回復興支援イベントを開催し地域住民の交流を促進する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・避難所機能の強化 個人スペースを確保するテント、災害用トイレ、ライト、ラジオ、水缶、炊き出し用テントなどの防災用資材を購入したほか、防災資材庫を設置した。</li> <li>・コミュニティカフェの運営 コミュニティカフェの開設に必要な備品、消耗品、運営費に使用した。</li> <li>・復興支援イベントの実施 防災ワークショップを2回開催した。</li> <li>・広報 広報誌を発行したほか、法人のウェブサイトの改修を行った。</li> </ul>
助成を受けて	<p>避難所機能の強化については、災害時に必要な資材を購入し、地域住民にも紹介することができ、地域の防災拠点としても住民に周知することができた。</p> <p>復興支援イベントとして、防災ワークショップを開催し、地元自治会の防災担当者などの協力を得て、防災訓練を実施した。</p> <p>コミュニティカフェについては、毎週開催し、コロナ禍により当初計画を下回る利用ではあったが、地域の憩いの場として定着しつつあり、障がいのあるお子さんを持つ保護者の相談の場にもなっている。</p>

### ■活動写真

#### 防災ワークショップの様子



助成年度	2020 A コース
団体名	NPO 法人あつま森林むすびの会
事業名	厚真町の森林における自然体験教育活動推進事業
事業概要	厚真町立上厚真小学校にて、NPO 法人北海道市民環境ネットワークと協力しながら上厚真小学校児童と共に町内の森林から採取した種子等を利用しながら苗木の生産を行い、北海道胆振東部地震によって崩壊した森林に対しにて植樹活動を行う。また、厚真町での自然体験教育活動の推進を図るため、当該会員及び厚真町教育委員会、教職員等に向けた講習会を行うと共に実際に町内で自然体験教育の場を提供する。
助成を受けて	町での森林環境教育推進に向け、森林環境教育について各学校教員との合同勉強会を行う。厚真町立上厚真小学校、厚真町立中央小学校の 2 校において計 16 コマの授業時間で森林教育プログラムを提供した。また、プログラム工場のため LEAF プログラムローカルインストラクター講座の開催と MFA チャイルドケアプラス取得を行う。更に、上厚真小学校児童と共に北海道胆振東部地震によって崩壊した森林のための育苗・植樹活動のサポートも行った。

### ■活動写真

上厚真小学校において、森林環境教育プログラムによる事業を実施した際の様子。

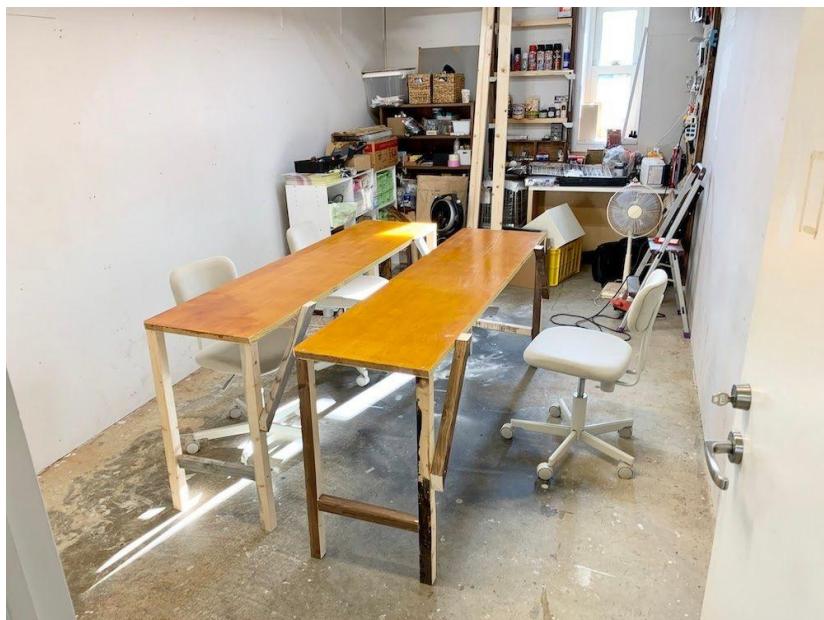
児童と森林に入り、自分たちが森林で見つけたものを集めた地図を作成した。



助成年度	2020 Aコース
団体名	一般社団法人安平町復興ボランティアセンター
事業名	コミュニティスペース「ENTRANCE」拠点環境改善事業
事業概要	住民、観光客、子どもたちが利用できるコミュニティスペースについて、1.ゴミを撤去して会議室を作る、2.LED 照明をつけて電気代を節約する、3. ウォシュレット付トイレにして、機能を高め、スペースの快適な利用と持続的運営を実現する。
助成を受けて	<p>①倉庫スペースの大型粗大ゴミを撤去し、要望の多かった「会議室」を作る。</p> <p>②コミュニティスペースの照明を明るくするため、蛍光灯から「LED」に変更する。</p> <p>③ トイレに「ウォシュレット機能」をつける。</p> <p>④ ロッカー、商品棚、その他消耗品や回収のために使用する備品の購入。</p> <p>以上を実施した。</p>

### ■活動写真

物置として使っていたスペースを改修。



助成年度	2020 B コース
団体名	オレンジたすきで繋ぐ ippo
事業名	仮設住宅に花を
事業概要	仮設住宅への花の設置(厚真・福祉仮設・安平町早来) 安平町早来へのウィンドウエアコン設置 気温上昇時のかき氷提供(6/13、7/20、8/12 計 3 回) 継続支援の食パンの配布 自宅再建し仮設住宅を出た方に、鉢植えの提供 道内外支援団体へ子供達へおもちゃを送る為の送料代他 ホームページ、リニューアル代として活用。
助成を受けて	4/6 より仮設住宅に花をスタートしました。4/24 には福祉仮設、6/19 には植え替え作業、6/23 安平町早来の仮設住宅に鉢植え設置。自宅再建等、昨年よりも全体数の減少により、仮設住宅を卒業したお宅には、多肉植物の鉢植えを渡した。安平町早来の仮設住宅に、厚真の方から譲渡して頂いたウィンドウエアコン設置。エアコンの環境が整っていない福祉仮設住宅へのかき氷提供。コロナの問題はあったが、昨年からの顔見知り・信頼関係と、正しい接触対応により、地元に住んでいるから出来る事を、予定通り活動している。皆さん大変喜んで頂いている。

### ■活動写真

仮設住宅を卒業された方へ、多肉植物の鉢植え渡した写真。



助成年度	2020 B コース
団体名	厚真手話の会てのひら
事業名	手話に親しもう！
事業概要	厚真町在住の聴覚障害者（会員）と苫小牧在住の聴覚障害者の方を講師に迎え、毎週金曜日の定例会で、テーマを決めて学習している。新規会員が増えたので、初心者向けの学習と、現会員のための学習を分けて行っているので、新たにテキストや手話辞典を導入したい。また、手話に興味があるとか以前に手話を勉強していたという方は、見学・体験ができる。手話を通して、聴覚障害者の方への理解を深め、社会参加を積極的に行う。
助成を受けて	新型コロナウイルス感染拡大防止のため、2020年3月～4月に手話の会定例会を休会したが、5月から再開し11月までの約7ヶ月間、手話の基本や日常会話などテキストを使いながら学習した。12月からまた感染が拡がり始めたので、翌年2月末まで休会としました。なかなか集まって相談ができず、冬に予定していた町民参加型の「手話に親しもう！」の開催は見送った。次年度には開催できればと考えている。

### ■活動写真

毎週金曜日の定例会の様子



助成年度	2020 B コース
団体名	あつまっぷる
事業名	体操教室の開催
事業概要	資金を受けストレッチバンドを購入し、自宅でもできるストレッチ指導し体操教室参加者全員へ提供。また、福祉施設へ寄贈する清拭布を切るハサミを購入し、皆が作業を行う事で資金の動きが見える形として活動した。
助成を受けて	胆振東部地震後、仮設住宅で暮らす方々の健康と心のケアを計るため三ヶ所の談話室で体操教室を週三回（月・水・金曜日）開催し一時間半位の軽い体操を続けてきた。その中で、使用するためのストレッチバンドを購入し自宅でも利用してもらうため参加者全員提供し狭い仮設住宅での運動不足の解消に努めた。自分達にも出来る事と表町仮設では福祉施設へタオルを集め清拭布を作り寄贈。上厚真の仮設では、牛乳パックを利用して座椅子を製作、一緒に体操をしていた仲間が施設に入所、入所者さん全員にプレゼントした。本郷仮設では、あつまっぷるで集めていたリングプルを選別し車椅子に代え三ヶ所に四台を寄贈した。

### ■活動写真

ストレッチバンドを利用してストレッチ。



助成年度	2020 B コース
団体名	Office あつぱ・ろーど
事業名	中学生・高校生のためのサードプレイス 『Light House』
事業概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自主学習スペースの運営（施設利用料、人件費、手指消毒用アルコールなど消耗品費、学習サポートのための参考書の購入）</li> <li>・子どもたちの声を届けるフリーペーパーやウェブコンテンツなどの作成 ⇒子どもたちの社会参加、まちづくりに参画できる仕組みをつくっていく過程を記録する映像作品の制作費（※本事業のほか、厚真町内で展開されている青少年育成事業も集約し、R3 年度完成予定）</li> </ul>
助成を受けて	<p>中学生・高校生のための居場所づくりとして、週 1 回の自習型勉強会を実施。2020 年 6 月から活動を始め、2021 年 3 月末まで計 43 回、延べ 410 名の町内在住の中・高生が参加した。大学生や一般のボランティア、学校の先生にも活動を支えていただいた。また、活動の中では地域の方々の協力を得て、あつま災害エフエム（2020 年 12 月閉局）での番組作りにも取り組み、子どもたちが選曲した音楽を放送し、パーソナリティにも挑戦した。このほか、2021 年 2 月には、子どもの社会参加を考えるワークショップを開催し、自分の好きなコトをまちづくりに活かすためのアイディアを、みんなで話し合った。このワークショップと連動する形で、今後、子どもたちが主体となり、地域振興を目的としたイベントを企画していきたい。そのために、岩手県釜石市とオンラインでつなぎ、プロジェクト型学習に取り組む高校生に話を聞く勉強会も 3 月末の活動の中で実施した。これからも、教科の学習だけではなく、様々な人と出会う機会を生み出し、子どもたちの好奇心を育てる居場所づくりを、継続したい。</p>

### ■活動写真

災害エフエムでのラジオ番組を企画。



助成年度	2020 B コース
団体名	あつま森のようちえんワッカ
事業名	親子での自然体験活動
事業概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>・厚真町内の自然体感活動。（森での自由遊び、創作遊び、山菜採り、生き物観察、季節の植物観察等）</li> <li>・厚真町ならではの農体験や食育体験。（米作り体験、ハスカップ、コクワ体験等）</li> </ul>
助成を受けて	普段の活動では、主に野外での親子活動となりますが、今回の助成を受けて、例年の活動に加えて、たくさんの体験活動を企画、実施することができました。2020 年度はコロナ禍で、年度初めは活動自体を継続することができるのか、心配されましたが、そんな時だからこそ、できる限りの感染対策を講じて、活動を再開、継続することの意義を感じましたし、社会全体が閉塞感に包まれる中、普段の活動に加えて、貴重な体験活動を行うことができたことで、会の皆さん大きな喜びを与えてもらえたことに、心より感謝の気持ちです。本当に」ありがとうございました。

#### ■活動写真

染色体験（ベンガラ染め）（2020.6.27/7.12）



助成年度	2021
団体名	オレンジたすきで繋ぐ「ippo」
事業名	「ippo」(仮称)～防災から発後、おそらく分けの支援体制のプラットフォーム～
事業概要	<p>防災から発災まで、被災者の声を元に、経験と知識と必要な情報を管理したプラットフォーム作り。</p> <p>誰もが簡単に利用出来、災害だけの話ではなく、おそらく分けを組み入れ、見聞きする機会を増やし、横の繋がり・気持ちの繋がりを感じ取れるものに。横の繋がりで確実に広め、関心を持ってもらう事により、地震の風化や、教訓、地元の繋がりを深めてもらう。</p>
助成を受けて	<p>被災者の皆さんとの会話から重要な話が聞ける。公表出来る内容を記載し、最も重要な話は伝えられる方に直接話す。農家さんからの恩返し・恩送りは、届けた先も農家さんも大変喜んで頂いている。</p> <p>まだ少ないが、一つづつ確実に進んでいる。風化している現状はあるが、確実に伝わるキッカケになっている。地元のHAYAさんと協働で、広める手伝いをして頂いている。</p>

### ■活動写真

ホームページを使って防災を学ぶ



助成年度	2021
団体名	Office あつぱ・ろーど
事業名	『ぼくらのまちづくり -自主学習会 Light House-』
事業概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コミュニティスペースを活用した中・高生の居場所づくり →週1回、町内のコミュニティスペースを会場に、学校の宿題や課題などのサポートをはじめ、子ども同士の交流や進路の相談など、中・高生の地域の中の居場所づくりを行う。</li> <li>・視野を広げるための学習会 →子どもたちが自分の進路を考えるヒントになるよう、町内外、自分が好きなことを突き詰めて活動する人や団体を、ゲストスピーカーに迎えて、活動や仕事の内容、進路を決めたきっかけなどを語ってもらう学習会を実施する</li> </ul>
助成を受けて	昨年度から継続して、地域の中での中・高生の居場所づくりを進めてきました。新型コロナウィルスの感染拡大、まん延防止重点措置の発出などにより、イメージ通りの活動とはいきませんでしたが、2021年4月から2022年3月までに計50回、延べ304名の参加がありました。視野を広げるための学習会として、北海道大学の学生さんによる進路をテーマにしたリモートトークの会（オンラインで開催）や、札幌ヴァーチャル雪まつりに関わる団体のVR体験会も開催。参加した中・高生は大学生の話に真剣に耳を傾け、VRの体験では新たな世界を見ることができ、良い刺激を受けていました。

### ■活動写真

北海道大学の学生さんによるリモートトークの会



助成年度	2021
団体名	NPO 法人アビースポーツクラブ
事業名	スポーツ探検隊
事業概要	子どもたちの『やりたい！』を実現するための事業”スポーツ探検隊”を実施した。
助成を受けて	安平町が日本初の実践自治体として承認を受けたユニセフ日本型「子どもにやさしいまちづくり事業（CFCI）」の理念に則り、子どもたちの声を元に実施し。コロナ禍で緊急事態宣言等により企画段階で中止せざるを得ないこともあったが、2回実現できた。 助成金を活用することで、コロナ感染症予防のため備品購入やスポーツ保険加入、さらにこれまで無償ボランティアでお願いしていた講師へ謝金を支払うことで、持続可能性を高めることができた。

#### ■活動写真

地元ソフトテニス少年団所属の子どもたちのサポートを受けながら、参加者はサーブやレスポンスの練習を行い、初めてのソフトテニスを楽しんだ様子。



助成年度	2022(コロナ禍による延長・継続事業)
団体名	NPO 法人アビースポーツクラブ
事業名	スポーツ探検隊
事業概要	<p>5月 8日 陸上（高学年）</p> <p>5月 22日 陸上（低学年）</p> <p>6月 29日 ソフトテニス 1</p> <p>7月 13日 ソフトテニス 2</p> <p>7月 20日 ソフトテニス 3</p> <p>8月 9日 バスケットボール</p> <p>子どもたちの『やりたい!』を実現するための事業”スポーツ探検隊”を実施した。</p>
助成を受けて	<p>安平町が日本初の実践自治体として承認を受けたユネセフ日本型「子どもにやさしいまちづくり事業(CFCI)」の理念に則り、子どもたちの声を基に実施しました。まだまだコロナ禍ということで企画段階で中止せざるを得ないこともありましたが、6回開催することができました。助成金を活用することで、各回イベント保険へ加入し参加者の安心安全を確保できました。講師への指導料としての謝金の支払や、参加者の満足度を上げ活動へ継続して参加してもらえるように参加賞を用意することができました。</p>

■活動写真

5月 22日陸上（低学年）で走りかたの基本を楽しく学ぶ様子



助成年度	2021
団体名	NPO 法人ポラーナ
事業名	馬でゴミ回収コミュニティーづくり
事業概要	2021 年度、安平町安平地区に当法人の事務所（コミュニティースペース・宿泊研修等）を建設する運びとなり、2022 年度からいよいよ安平地区の拠点として活動を始めることになった。2020 年 11 月から馬を飼育し始め、馬との暮らしを始めた。高齢化し、2024 年度には小学校の統廃合もあり、この地域に子どもが通う小学校が閉校する予定である。こういった地域の中で、より今後も地域のコミュニティーアー力を高めていきたいと思い、馬（動物）の力を活用しながら地域の方々との関わりを持ちたいと思い、この地域限定で馬のリヤカーでのゴミ回収を企画した。地域の方々の家庭からでた不要なものの（ゴミなど）を一軒一軒回りながら運び出すお手伝いを動物とすることで、新しいコミュニケーションやつながりが生まれることを期待している。
助成を受けて	馬具の購入は、海外からの輸入という形をとらせてもらい、その部分でのやりとりに少々手間取った。また、購入後、馬具を装着し、練習を始めたところ、予想以上に時間がかかり（馬が物を引くことを覚える、環境に慣れる（道路を歩く、対向車や人とすれ違う、追い越される、地面に地割れがあるなど）ことにはそれなりに馬も人にも労力がかかることが分かった。

また、実施にあたり、ゴミの回収方法や運搬方法、ゴミ処理場との話し合いをした結果、一般廃棄物の取り扱いなどを現実に知り、結果的には大々的に「ゴミ回収」として打ち出すものではなく、地域の賑わい創出というところからの出発に決断。自治会長と話を進めていく流れができた。色々と現実が見えてきたこと、馬が慣れてきてそろそろ！というところで北海道に蔓延防止措置が発令・延期することになり（当地域でのコロナ罹患者増大もあり）、自治会内での話し合いすら延期の状態になり、活動が滞ってしまった。しかし、自治会でも新しい取り組みや、疎遠になってしまった子ども会活動・地域活動を盛り上げるものとして関心を持ってもらえ、実施ができそうなところで今年度は進めることができた。

助成年度	2022(コロナ禍による延長・継続)
団体名	NPO 法人ポラーナ
事業名	馬でゴミ回収コミュニティーづくり
事業概要	2022 年度まで安平地区で地元の農家さんたちが行っていた「野菜直売所」が高齢化により終わりを迎えました。一方で地元の人たちが「なくなつて残念」「(直売所を) やつてほしい」という声が私たちの耳に入りました。地域の賑わい創出ということで、法人としても 7 月～10 月末までの 4 ヶ月間、毎週土曜日に「ちいさな野菜直売所」という名前に変えて受け継がせてもらうことにしました。元々農耕馬を飼っていた地域もあり、ポニーのリヤカー馬車及びふれあい活動、野菜の配達などを試みました。
助成を受けて	野菜直売所はただ野菜を買うだけではなく、そこで買い物をしながら集まる地元の人たちの談笑の場でもあったため、今回の野菜直売においても、みんなで集合時間を決めて買いに来てくれたり、その後にみんなで輪になって話を始める姿が見られた。ポニー 2 頭が色々な役割を果たすことで、たくさんの方々に喜ばれ、馬に会いに来たり、毎週野菜を買いにくるだけではなく、コミュニケーションをとりに来てくれる人まで増えていった。昔御者をされていた方が懐かしがりながら馬を曳いてくれる姿も見られた。翌年にもやってほしい、と要望が出て、今後も継続して続けられる基盤ができた。

#### ■活動写真

野菜購入後の団らんが地域コミュニティの肝(ポニーの姿も後ろに映っています)



助成年度	2021
団体名	NPO 法人とあさ村
事業名	コミュニティサロン「みんなの家」運営事業
事業概要	<p>○コミュニティサロン の運営 コミュニティサロンにボランティア制作による薪棚を設置したほか、窓エアコンなどの設備を設置。</p> <p>○防災ワークショップの開催 東北大学定池先生、皆花様、行政、地域住民の協力により防災ワークショップを開催した。</p>
助成を受けて	「みんなの家」の運営開始から 2 年が経過し、コロナ禍にはあるが、薪棚制作にも地域のボランティアが参加してくれるなど、少しずつ地域の憩いの場として定着してきている。防災ワークショップにおいても、企画段階から地域の方に参加してもらい、地域の方と一緒に地域の防災について考えることができた。厚真町のコミュニティカフェの視察や地域おこし協力隊の受け入れの決定、地域食堂についての検討を進めるなど、次年度以降の活動の展開に向け準備を進めることができた。

### ■活動写真

防災ワークショップの様子



助成年度	2021
団体名	あつまっぷる
事業名	体操教室
事業概要	コロナ禍の中、集合して体操教室を開催するのが難しい時期には自宅でできるストレッチを行ってもらうためリーフレットを製作して配布した。早期再開を楽しみにしている参加者のため感染防止対策(空気清浄機・パーテーション)、消毒用品を用意し再開のため準備を行った。町でタブレットの貸出を始めたので、サポーター全員で講習会を開催し、お互いの意思疎通を図るため毎週月曜日にリモート会議をした。また、みなさんと楽しく体を動かす一助となるように、手話を使って童謡を歌う取り組みを始め、リモート会議で練習し会場で一緒に取り組んだ。間違いも笑顔になり、気持ちがほぐれているようだ。
助成を受けて	感染対策に取り組み、体操教室参加者の心と体の健康管理に努めた。サポーターの協力のもと、会場の換気や利用する椅子などの消毒を行い感染防止を徹底している。被害の多かった北部地区には、タブレットを使い、リモートでの体操教室を開催できるまでになった。移転を余儀なくされた被災者を地域の人々と結びつけるのが大きな目的です。

助成年度	2021
団体名	おはなしのびっ子
事業名	親子で楽しめる読み聞かせイベント in 厚真町文化祭・図書フェスティバル
事業概要	<p>2021年11月3日水曜日10:00~12:00まで、厚真町青少年センター2Fホールにて、親子で楽しめる読み聞かせイベント in 厚真町文化祭・図書フェスティバルを開催。月に1度の読み聞かせお話し会の内容に加えて、親子でパネルシアター、ペーパーサートを作成し、自宅でも楽しめるようにした。</p> <p>お話しは絵本に限らず、大型紙芝居、パネルシアター、ペーパーサート、エプロンシアターなど楽しめるものがあり、自分で工夫することで想像が広がり、親子で楽しめることを知ってもらうよう務めた。</p> <p>親子合せて約20人が参加した。</p>
助成を受けて	<p>毎月のお話し会では、こちらが演じるばかりで一緒に作成することが難しかったが、今回親子で楽しめることを提案できて、喜んで帰ってもらえた。</p> <p>新型コロナ蔓延により、マスク着用、フェイスシールド着用など試行錯誤を重ねてきたが、歌や大きな声を出すことが苦しい、条件にあうアクリル板がないなど難しい対応を迫ってきた。しかし、今回二人演者のパネルシアターでもピッタリのアクリル板を設置でき、ピンマイクも活用できて演者、参加者ともに有益だった。</p> <p>前日の準備では、厚真高校の職場体験実習生に会場設営を手伝ってもらえた。反省点としては、初めての試みで、必要な物品の把握が難しく、準備に2日かかってしまったことである。また前日だけでなく当日も中学、高校のボランティアを募るなど幅広い年代のイベントにすることも今後は考えていきたい。</p>

### ■活動写真

大型絵本「おかしなかくれんぼ」



## 採択団体インタビュー 助成事業を終えて

北海道胆振東地震から部約3年間にわたりコープ基金として安平や厚真を中心とした団体にご活用いただきました。助成期間が終わって2年から3年経って、活動を振り返っていただきました。(インタビュー日 2024年8月25日。厚真町にて)

### NPO法人とあさ村 青木明子さん

2020年度・2021年度採択 コミュニティサロン「みんなの家」運営事業

#### NPO法人とあさ村とは？

障害を持つ方、高齢で介助や交流が必要な方が一緒に楽しむことを基本方針に、体験農園事業や地域住民、観光客との交流を目的とした喫茶店及び食堂運営事業などを通して、日中に活動する場所の提供、福祉サービスを提供する事業を行うと共に、様々な生産活動やボランティア活動、助け合いの気持ちを広める啓蒙活動を行い、福祉の増進及び健やかに生活できる地域社会づくりや、まちづくりに寄与することを目的とするNPO法人。

#### 自身のやりたいことを通じて、地域の人たちと繋がりあっている

##### ●助成終了した後はどのような活動をされていますか？

コロナ禍で外に出歩きにくい状況になってしまい、特に高齢者が高齢者を自宅で見るというパターンが多くなりました。おうちにも人を呼べない状況だったのでカフェは開けていましたが、誰も来ないことが多く、その分運営費はかかるので、あちこちお世話になっていました。

#### 災害時の受け入れ体制を整えていく

その中で定池祐季さん（本事業の選定委員）にご協力をいただき DoHUG を開催しました。開催背景として、災害時の避難場所として一般の方は町民センター（公民館）に行きますが、とあさ村（障がい者等の受け入れを行う）との連携をどうするかがずっと課題でした。12人程で勉強をし、当事者の気持ちになりながら全員で考えることができたので、参加者からも好評でした。

地域の方から寄贈いただいた布団もクリーニングして保管している状態のため、災害時には困っている家族だけでも来てくれたらと思っています。

### 協力隊員や近隣団体との連携

昨年は農作業をメインで手伝ってくれる協力隊を募集してきてくれることになりました。NPO法人ポラーナさんとの協力があったり、仕事をかけもちしながら協力隊の方が活動をしてくれています。その方はいま福祉事業所を3年後に設立するための活動をしています。将来的に福祉事業所の拠点になったときに、コミュニティスペースの開放やカフェの日数を増やして解放するなど、地域とのつながりを増やしていきたいです。地域の人たちも、子ども食堂の開催時にはお手伝いに来てくれたり、毎回5人以上の方が関わってくれます。

### 元々ノウハウのない自分たちだからこそ、発信していきたい

災害は地震だけでなく気候変動もあってなにが起きるか分からない状況の中で、障がい者の人が日常の中で顔を合わせていることで、特に非常時に対応ができるようになります。自分たちの活動を発信や、カフェや農園を運営していると障がい者のお子さんを持つ保護者の人が来られます。家庭内の愚痴を言えたり、普段相談できない悩みがある中で私たちを知って来てくれて現状を話したり相談をしてくれます。最近、近隣市町村から来られた方は、お子さんの特性上「子どもが中に入れないかもしれないけどいいですか？」と仰っていましたが、カフェの奥のスペースに入れて食事ができて「こんなことは初めて！」と仰る保護者の方もいました。情報を発信することで、必要な人に情報が入っていくのは大事なことだと改めて感じます。

最近では、保護者の方が、自分の地域でも何かやりたいと思われて視察に来てくれます。保護者が経営していることは少なく、ノウハウがないからできないと思われる方が多いです。一方で、他の場所では福祉事業所やカフェの専門の方がやっているパターンが多いのです。だからこそ私は今の活動を発信もしたいと考えています。

特に田舎は仲間が少なかったり、特性を持つ子たちが活動できる場所が少なかったり、そもそもニーズが少ないこともあります、それでも私たちはやっていきたいのです。これからも運営ができるかがネックになることもあります、この子たちが暮らせるように、どう実現できるかを考えたいです。地方にいくほど理解が必要だなとも感じます。

保護者の方たちもここに来てなにか答えを求めて来る感じを私たちも感じているので、田舎で場所をつくりたいという人たちとの力になれたらと思っています。私たちとしては、障がい者が地域にいることを知ってもらいたい、そしてそれが地域の人たちの目に見える状態で活動ができている、それが私たちの特色だなと思います。

## 教育にチカラを入れたまちへと転換

### ●胆振東部地震から6年が経過しましたが、いまの地域の様子はいかがですか？

コロナ禍明けと同時に、安平町内に早来学園が新設されて、まちとしても移住の方に力を入れていると思います。それがきっかけで安平町に移住された家族も多いはずです。一方で高齢者は地震があった後、安平から離れる方もいました。ご家族が心配される面もあったとのではと思います。転居される方が始めて代替案としてまちが考えたのが、学校の耐震化でした。

安平町内の学園が統合されること自体賛否両論ありました。ただ新しい教育になったことで移住者がかなり増えました。教室が足りなくなるのではないかとも言われています。

子ども園も働きやすい状況になっているので、臨時保育で延長してもらえるようになり、町外のお子さんも受け入れてもらえる体制ができます。

地域食堂にくる方も移住者家族が多いです。5年ぶりに開催されたグリーンフェスティバルでは、これまで運営メンバーは自治会の高齢のメンバーばかりでやっていましたが、一新して平均年齢が若かったです。震災後は一瞬人も減りましたが、まちの雰囲気は若返ったようになります。震災時のボランティアの方や、協力隊員の方たちも任期が終了すると同時に地域から離れた人も多いですが、自分の都合を見てイベント時に協力してくれるような関係性になりつつあります。

いまは震災よりも「教育」の話題が多いです。まちとしても教育を中心としたまちづくりに向かっていると思います。

## これからの活動について

### ●これからどのような活動を続けていきたいと考えていますか？

いま助成金を受けられているわけではないので、今後はこじんまりとやれたらなと思っています。計画的に準備をしていきたいです。

例えば、大きな災害で避難が必要になった時以外に、家庭内でどう対処するか、備蓄や電気がなくなったときの対応をどうするか等、話題としてあがってきています。ガスを使わず、どう食事をとれるか、電気がない時にどう暖を取るか、木山さん（地域おこし協力隊）がいてくれるので、2人だと相談しながら考えることができます。

他にも、防災にもつながるキャンプの実施や、こここの場所を知つてもらうという意味合いも含めての防災ワークショップを開催したいです。

子ども食堂に関しても、ここを知つてもらうため、あくまでもきっかけづくりの位置づけとして運営をしていきたいです。理事のみなさんにも理解してもらいながらたとえ赤字になつても運営し続けていきます。運営をしていると経済的貧困家庭の1,2組ほどに出会います。でも、そういう人たちのためにやっていきたいのです。

## 地域全体で理解し合えた先に、社会全体での理解も進む

●青木さん自身が活動の中で大事にしていきたいことはどんなことですか？

暮らしてきた地域でこれからも暮らしていけるような居場所づくりです。

障がい者や高齢者、そういった人たちが地域で暮らせられて、自分たちも楽しいし幸せだと感じます。

活動の中で自然栽培に行きついているのも、化学肥料農薬がない環境は、「どのような人たちにとっても良い」という考え方でやっています。それが軸でこの活動場所も生まれました。こういう小さな地域でも特性等をオープンにしていけるという点で、社会全体で特性に対する理解が進んでいったらいいなと思います。やってきてていることの全てはそこが大事だと思っています。

## 採択団体インタビュー 助成事業を終えて

北海道胆振東地震から部約3年間にわたりコープ基金として安平や厚真を中心とした団体にご活用いただきました。助成期間が終わって2年から3年経って、活動を振り返っていただきました。(インタビュー日2024年8月25日。厚真町にて)

### オフィス・アップロード 上道和恵さん

2021年採択「『ぼくらのまちづくり-自主学習会Light House-』」事業  
2020年採択「中学生・高校生のためのサードプレイス『Light House』」

#### 現在もサードプレイスを継続中

##### ●助成終了した後はどのような活動をされていますか?

いまも申請した活動を継続していて、定期で毎年毎週水曜日は事務所を開けて活動をしています。来るのは中学生で。1人、2人のときもあれば友達と3、4人くらいで来るときもあります。週1回空けて、勉強道具持っておいでと言っています。活動内容は当時と変わっていません。最初の30分頑張って勉強して、その後は友達とお喋りしたり、ゲームしたりする子もいます。自由にしていいけど勉強もしてね、という感じですね。居場所をつくるのに保護者が安心するのが「勉強を見ます」ということなので、学習塾ではないですが、居場所としての働きも持たせています。

#### 子どもたちに配慮はするけど態度は変えなかった

##### ●発災当時通っていた子のことを教えていただけますか?

当時中学生だった子はいま高校生、社会人になります。その子たちは毎週ではないですが、時々事務所でたこ焼きパーティをしようと集まったりしてます。

胆振地震があったからというよりは、厚真町の暮らしの中で関わっている子どもたちなので、特別な変化はなく、元々あったものが地震のときにも活かされてきている感じがします。元々あった子どもたちに関わる活動や地域活動があった上でのことなので、平時からの活動や普段の生活からのつながりのほうが、子どもたちにとってはストレスが少なくて大事だと思います。善し悪しはあるのでしょうか、外から支援で入ってきた知らない人から声かけられるよりは、普段から関係ある、叱られたりしているおじさんおばさんから声かけられる方が安心するのではと思います。

外からの支援がたくさん入ってきたなかで地元の力をどう活かすのかって、普段どういう関わりを築いているのかというのが重要なんじゃないかと思います。

地震があった直後は、普段見かけない人たちが支援に入ってきました。子どもたちを大事にしてくれるのですけど、その子たちは、「すごいかわいそうな子たち」ではない。生活が大変でかわいそうだからサポートしましょう、お世話をしましょうというのには違和感がありました。もちろん、みんなが一緒に環境ではなく、大変な状況の子もいるのですが、それでも「かわいそうな子」ではない。避難所において、わがまま放題やってる子がいたり、お菓子のゴミ放置していたり、震災のストレスじゃないかと危惧して、全然注意しなくて、怒らない人が多かった。

私は、配慮はするけど、態度は変えないみたいな。大人から集めてきた被災の情報で、「つそここの家、ここが壊れているらしいよ」とかそういう情報を把握しながら、さじ加減といいますか、いかに手を出したり出さなかったり口を出したり出さなかったり、気をつけていました。普段の様子が分かるからできることで、全然違う地域、いまだと能登半島に自分が行ったときには全く違う対応だとは思いますけど。

#### 外部支援者と町内の動きの調整の難しさ

●町外から来た支援団体や行政機関と子どもの状態などについて意見交換、情報交換はしましたか？

外からきた支援団体さんとの意見交換は、子どもの関係に関しては教育と福祉課で連携してやってきたが、教育委員会の人たちと毎日子どもに合ってる自分たちとは見えているものが違っていてそこに対する認識も違ってきます。外からの支援をどう地域にまわしていくかが彼らのメインだったと思う。

地元の人たちは、小さな活動でもやれることははあるというんですが、その調整はあの状況では難しかったと思います。行政もあって、外からの力もあって、地元の力もあってというところの采配をしていくのは難しいところがあったでしょう。

地元の人たちからすればやれることもあったし、やりたいこともあった。もっとやれたのにという思いもあったし。教育に限らず福祉も、産業も、これは必要、これはいらないと選別して割り切るのは難しかったでしょうね。

最大の防災は日ごろどう地域で暮らしているか、備えをしていても、災害それぞれ全然違うので、東日本や九州、北海道全然違うんです。いくら備えていてもマッチしないという可能性は大いにある。普段関わって暮らしていると「困った」と言える。困ったといえるかどうか、それが言えない不安や不満につながる。「大丈夫？水ある？食料あるよ、取りにおいて」そのときに言えるかどうかって、日ごろどう生きているかに関わってくると思うので。

#### 「町の人はまず動かなきゃから始まる」

●この基金では被災三町（安平、むかわ、厚真町）の団体さんに支援しようとしました。「支援があればこんな活動をやれたのに」という方たちがいたと思います。個人やグループ数人

グループ対象者が増えていたらよかったのにと思うことはありますか？

団体対象でよかったのでは？と思ってます。もちろん動ける人たちとそうではない人がいて、被災のレベルの差もありました。地元でなんか動こうという人たちは、資金があるかないかではなくて「とにかくまず動いちゃえ。お金がついてきたらラッキー」くらいの気持ちだと思います。助成があるから動こうではなく、これが必要だから動こうという感覚だと思います。人材がほしい、資金がほしいというのは、初動のあとに付随してくる。でもまずは動けちゃうというのが大事かなって。

●この基金の情報は、町の人たちにどれくらい認知されていましたか？

日頃の助け合いの部分でスタートしていて、特に活動しようという意識ではなかったのですが、私は自分自身が情報に近いところにいたから入ってきやすかったですね。

●そういう方に伝えるとしたときに、どういうルートがあるでしょうか？

行政の優先順位もありますけど、社協とボランティアセンターに置いておくのがいいのではと思います。地域を巡回していたのは保健師さんが多かった。ハードや建物は建築や土木の人たち。人の部分は保健師さんや学校、教育関係でした。(今回のような助成金であれば)教育や福祉関係に情報が入っているといいなと思う。

暮らしているのは私たち-普段から自分のまちのことは自分たちでまず考え、外からの支援を活かせるように

●発災から6年経過した厚真町の様子はどう映っていますか？

見かけの部分で言えば、土砂崩れあったところは、茶色から緑になりました。目にも優しい、気持ちにも優しい。

2年で仮設住宅からそれぞれの場所に移動していくというのが、小さなまちだからこそ良し悪しはあるだろうし、時間をかけたほうがよかったのではと思う人もいれば、次が決まってよかったという人もいる。それぞれの感覚や感じ方が違うのでなんともいえない。

ただ、ここから次へ、動かしていく一歩が見えやすい期間の中で「2年でやっていきます」という面では他地域と比べて規模感とスピード感はあったと思ってます。

それで救われている人もいるが、もう少し時間をかけていたかったのにという人もいる、それは分かった上でですけど。子ども達といる分には、地震の話もフラットにできる子が多いです。トラウマの子もいると思うが、この時期くらいになると、あの時ああだったね、こうだったねと話す子もいたりする。周りの大人の努力もあると思うが、表現できる子が多いのが救いです。

そこからいろんな経験をして、自分の進路に影響したという子はあまり聞いてはいないけど、ボランティアがあったら行ってみたいと言っている子たちもいたりする。大変な思いを

したという経験が必ず子ども達の力になるはず。地震のあった能登半島のことも考えられる、自分事として考えていけるようになってほしいなと思います。

普段いかに自分の活動でつながっていけて、すぐに動ける、「困ったな」と思ったときに行政と一緒に相談ができる。ここに相談してみようというチームになれていたらしいですね。プレイヤーとして地域のおじちゃんおばちゃんたち子ども、親子、サポートをしている人たちがいるので、地域の中で活動が続いている。地域の中でプレイヤーが育ってきている感覚がすごくある。なにかあってもなくても、自分たちのまちのことは自分たちで考えられて、困ったことはまずは自分たちで考えてみる。何か足りないとなったら外や行政の力を借りてみて、地域のことを人任せにしない。もっと町の中でできることがあるはずだ。自分たちで気づいて自分たちで使っていく。なぜなら暮らしているのは私たちだから。外からくる力を全て拒否するのではなく、何が足りていないのか、でも来てくれてありがとうという気持ちは大事にしたいです。

●行政や社会福祉協議会は防災的な観点で継続的な活動をされているのでしょうか？

個別の案件や、災害に関わらず介護や高齢、障がいの方に対してフォローが業務として大変そう、集落の方もどうしようかと。社協も一プレイヤーとして参加します。

行政や社協も一プレイヤーとしての関係性がどう築けるかが大事。本来業務がありそれにやらなきゃいけないこともある。核がない難しさは感じます。協議会が一番難しくて、誰がやる？誰がどう振るのか？周りとのバランスを考えなきゃいけないとなると、消化不良ということもあって。

モチベーションも人それぞれだが、「地域の人たちに喜んでもらいたいね。こういう課題に対応したいね」というのは共有できて、具体化するとこの形だ。この形をつくるためには得意なところ、リソースを出し合ってこうだとフラットにいろんな場面でしていくとよりよくなっていくのかなと。難しいけど・・・よりどころのなさみみたいのが難しいんですけど、厚真は少しずつそれができるようになってくるのではないかなど気配を感じてます。

### コロナ禍の復興支援、難しかった外部支援者との関係づくり

●移住の方、事業立ち上げの方が当時はいらっしゃった感じがする。今もその動きは続いていますか？

地域おこし協力隊も継続募集されていますし、ローカルベンチャーという形でやっている。生計を立てて3年後にはこうなりますというプランを持って協力隊になって、3年で準備しますというよりも、これまで準備してきたことを3年で実現しますというスタイルで採用しています。最近は、違うタイプの方も出てきたようですが。

協働型支援員、起業して5年以内の事業者のところに従業員として入る。新規事業の人材補充として入るのもあったりします。東北で活用されていたやり方らしいのですけど。どれだ

けいま町の中で活動しているかは、おや？と思うところもするんですけど。発災当時に入ってきた人はまだ残ってますね。5, 6年経つので地震関係なく、災害関係なく入ってきている方たちもいる。

外からきた人を巻き込んでイベントをやろうとしてた時がコロナだったので、関係を継続させていける時期で、移動ができなくなり物理的に接点がない状況が 2 年ほど続いてしまった。もったいなかつたですね。外からの人との繋がりを保つ前にストップしてしまった。その中でも何人かの方は、特にボランティアセンターで活動している人たちは残ってくれる人がいます。

●平時の防災は非常に重要とおもっているが、それだけでは難しいなとも思います。防災と聞いてもピンとこない方もいたりするのではないかと思うのですが？

おじいちゃんおばあちゃんどうしようとなったとき、相談できる人の顔がどれくらい思い浮かぶかですよね。それで自分の命が守れるか、気持ち的に心強さがどれだけあるか。小さい町はまだしも、大きい町だと行政頼みになってしまいがちではないでしょうか。パニック状態でお互い様ができるか。小さい町でも移住者コミュニティと地元のコミュニティとの違いとか、距離的な隔たりもあるし。自分たちはどうなんだろう、なんかあっても大丈夫と思えるか、自分でなんでもかんでも用意しなきゃいけないのか。厚真でも関心あるないは違うし、世代によっても違う。自分が暮らしてる地域にどれだけ関心が向けられるかは結構課題だなと思います。そこが明確になると、災害だけじゃなく、なにか話し合わなきゃいけないときに、分断してしまうのか、話し続けられるのかの分かれ道になると思います。

**幸せは 10 人 10 色、それを実感できるような教育活動を続けたい**

●これからやりたいこと、こうしていきたいというのはありますか？

地域のプレイヤーが小さなコミュニティをつくって、そこがつながる、この指と一まれそこでやりましょう、足りないものなんだ、こうしたほうがいいものなんだ、点だったものを線にして面にしていく作業が必要だと感じる。地域のプレイヤーさんはそれぞれに力はあるが、まとめていくができない、次のステップはそこだ。そこをつないでいく役割が次は目指すところだなと思う。結果として地域の活性化につながったり、防災・減災につながる、地域力、地域の力、自分たちの力を還元していく。それがいろんな可能性につながつたらいいなと思います。

●活動する上で大事にしたいことは何ですか？

社会教育からまちづくりをしたいと思って仕事をしています。教育活動ですね。暮らしていれば地震や予期せぬことが起こり、普段の関わり合いや、子どもや学校や大人との関わり合い、こどもを取り巻く環境って大人がイメージしている通りにいくわけではなというのをいま

まで経験してきました。子ども達には自分はこれをこう生きてきて幸せだと実感を持っていきてほしい思ってます。人それぞれ幸せは違う。幸せの定義は違うけど、それぞれにとって幸せの実感は感じられると思っていて。子ども達や自分たちにも、いいんだこれで僕は幸せなんだと感じられるかどうかがすごく大事だと思っていて、100人いて100人と同じ幸せは与えられないけど、100人なりの幸せを実感できる教育活動をしていきたい。そういう教育活動があれば面白いですよね。

そういう場や、子ども教室も一つだし、サードプレイスもそうだし、ライトハウスは2時間事務所ひらいているだけですけど、そこに子ども達が集まって、社会人になってもつながりがある。場所代と言って置いていったお金もカンパしてくれる。それをこどもたちのパーティにつかって「先輩たちのおごりだからね」という話をして、みんなが大人になった時にカンパしてねという「恩送り」してくれるようなシステムをつくっていく。

自分の労力だけでなく、それが長所を活かして、それが形になっていく場づくりの面白さがあるので、「みんなでやればできる」を増やしていくことを目指してます。これが楽しい、これが自分の幸せだなと思える場所が増えていったらいいなと思ってます。





## 寄稿

「コープ基金の立ち上げを振り返って」



元北海道NPOサポートセンター職員／札幌市議会議員 定森光

コープ基金を振り返ると、被災地の復旧・復興のための活動を3年間応援するという長期的な視点に立った基金が、発災から半年経った時期に立ち上がったことに、いまでも感慨深いものがあります。記憶が薄れてきており、事実関係に誤りがあるかもしれません、記憶を手繕り寄せながら、立ち上げの経緯を書きたいと思います。

コープ基金の立ち上げは北海道生協連と北海道NPOファンドの協働によるものですが、立ち上げにあたっては北海道NPOサポートセンターとの関係が欠かせません。当時、私が所属していた北海道NPOサポートセンターは、NPOファシリテーションきたのわ、きたネットから複数の団体とともに、胆振東部地震の発災直後から「情報共有会議」を定期的に開催していました。この会議は、毎週木曜日に被災地である厚真町、安平町、むかわ町で行われており、被災された方々の生活再建を支援するため、支援者同士が連携を深めたり、状況の変化に応じた支援策を話し合ったりする場として機能していました。

発災直後には、道内外から多くの支援が寄せられ、第1回目の情報共有会議には61もの団体が参加しました。しかし、時間の経過とともに参加団体は減少し、12月頃には20団体程度にまで減り、被災地で活動を続ける団体は限られた存在となっていました。ただ、情報共有会議の参加者は減少していましたが、継続して参加していたのは、仮設住宅で暮らす被災者や在宅被災者の支援を通じ、生活再建に向けた中長期的な活動を続けている団体ばかりでした。北海道生協連もその一つであり、当時の平専務理事は、第1回目の会議から継続して参加してくれていたのです。

当時、多くの支援団体が直面していた大きな課題の一つは、中長期的な活動を続けるための資金確保でした。12月になると、被災地ではようやく仮設住宅への入居が進み始めましたが、被害の少なかった札幌市では災害への関心が薄れ始め、復旧が始まったばかりの被災地との温度差が大きく感じられました。活動団体への助成金も、発災直後には複数存在していましたが、時間の経過とともに減少していき、交通費等の捻出に苦労する団体が増えてきたように思います。また、被災地の住民の中には新たに支援活動を始める動きも見られましたが、活動経験が乏しいために既存の助成金制度が利用しにくいという課題も浮き彫りになりました。

新たな助成制度が求められるなか、情報共有会議の運営メンバーとコープさっぽろの意

見交換が 12 月に実現し、これらの課題解決に資する基金の立ち上げに繋がっていきます。この基金立ち上げの意見交換は、情報共有会議の運営メンバーで日頃からコープさっぽろに関わりあるメンバーがいたことに加え、情報共有会議に平専務が継続して参加しており、中長期の支援の必要性を北海道生協連、コープさっぽろの皆さんのが実感していたからだと思います。

被災地への支援が減少しつつある中、発災から半年後の 2019 年 3 月に立ち上がったコープ基金は、生活再建やまちの復興に向けた被災地の取り組みを長期にわたり支援してきました。特に、住民自らの活動を丁寧に応援し続けた点は、他の助成制度にはない重要な役割を果たしてきたと感じます。

次に起きた道内での災害支援においても、住民に寄り添い、活動を長期的に支えるこうした基金は欠かせません。コープ基金で培われた経験や知見が、災害支援に関わる多くの方々によって次の支援活動に生かされていくことを心から願っています。

「コープ 2018 年北海道地震ボランティア応援基金」福祉 NPO 支援ネット北海道代表理事／山本純子  
(選定委員)



停電。

自分が住んでいる街（札幌市）で停電があるなんて……まったく想えていなかった自分にまず、驚いた。福祉分野の中間支援 NPO という立場で常日頃、利用者に対して臨機応変にサポートしている現場の事業所職員に向かって「今回の法改正は……」などと、運営に関わる話をしているのに、次の対処方法を考えるという冷静な自分を取り戻すまでに、こんなに時間がかかるなんて思いもしないことだった。不安が押し寄せてくる暗闇の中で利用者がただ泣いていたと話していた職員はおそらく家に帰ることも出来なかっただろう。

自分自身もあとになって「さあ、何からはじめる？」と自分に問い合わせ始めたときには、周囲の人たちがもう動き出していた。

家族は携帯電話の充電器や小型発電機を準備しようとしていたし、近所のコンビニでは店長判断でご飯を炊いていた。自法人の会員である事業所でも利用者の安否確認やケアマネによる訪問がはじまっており、職員と利用者の安否確認が終わるころには、有志の炊き出しが始まっていた。

その迅速な対応に心強さを感じ、自分は情報発信、情報共有に努めたことを思い出す。厚真では震度 7 を観測、北海道の人が体験する最も大きな揺れだった。斜面崩壊という言葉をしっかり意識したのもこの時だった。おそらく揺れの大きなところでは、とてつもない恐怖を感じただろう。

コープさんの基金のネーミングは「ボランティア応援基金」となっており、支援したいという「人」を応援する意味を持っていたことから、応募団体もその志を持った人たちであったと思う。応募書類からもその熱量が伝わってきた。

居場所づくり、子どもの支援、学習支援、自然体験支援、崩壊した森林の植林支援、本を通じた支援、農業の応援、健康づくりなど、これまでの活動ノウハウを活かした「地域に必要な支援」を生み出そうとしている（もしくはすでに活動している）人たちのアイデアと行動力が間違いなく地域を元気にしてくれると思った審査場面であり、関わらせていただいたことに感謝を申し上げたい。

また、基金に取り組んだ翌年から新型コロナウイルスの感染が拡がり、活動の停滞や縮小などの影響が出た。支援の輪が拡がる兆しが見えた中での感染症は、活動者の意欲と被災者の気力にダメージを与えることとなった。

報告会（交流会）で団体間でつながれたことが良かったという感想があった。コロナ禍を乗り切った互いの頑張りを共有し、讃える場となつていれば嬉しいと思う。

小さな団体がそれぞれの手法で活動を拡げ、「必要なところに必要な支援を！」という、地道でピンポイントな支援を展開できたことが今回のコーポ基金の成果ではないかと考えている。コーポ基金で活動を支えてもらった団体は、災害支援の枠を飛び越えて、これからも小さくて大きな歩みを続けていくだろう。今後の活動にますます期待している。

## 基金の基礎情報

発災間もない初年度の採択団体採択額の比重を高め、2年目、3年目は遞減させていった。助成対象は、全国的な被災地支援団体が撤収した後を考え、被災地を拠点とする団体からの応募を重点募集した。

助成対象活動は、災害の支援活動および、被災された地域の生活支援・まちづくり活動（防災への取り組みを含む）とした。

助成金の使途は、50万円以上の申請については、NPO会計における管理費の割合を5割以下とする以外は制限は設けていない。

事業内容を変更する際は事前相談が必要で、特にコロナ禍が深刻になった20年以降は事業期間延長についても事前相談の上で可能とした。

## 基金の設計

### 基金としての目標

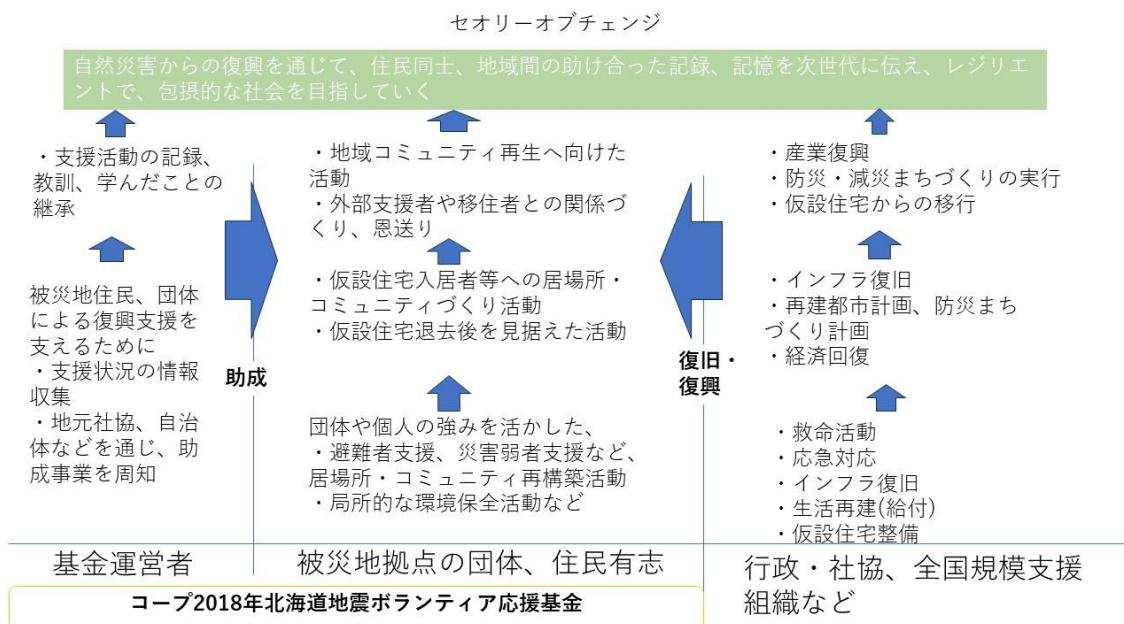
胆振東部地震の被災地に拠点を有する NPO や、協同組合、学校法人などの非営利法人やボランティア団体による平成 30 年北海道胆振（いぶり）東部地震災害に対する支援活動や、被災された地域の生活支援・まちづくり活動（防災への取り組みを含む）を活性化する

初年度 緊急対応期 500 万円 弱	2 年目 復興初期 300 万円	3 年目 復興初期～地域 再生期 100 万円余
環境回復など災害支援活動 2 を 含む 12 事業	居場所・コミュニティづくりを 中心とする 8 事業	防災 2 を含む 7 事業
被災地支援活動、生活支援	やや生活支援寄り	生活支援重視

3 年を通じて、被災 3 町の活動の担い手を支援する方針があり、助成配分は初年度に傾斜して行われた。胆振東部地震は 2018 年 9 月に発災し、この助成事業は、2019 年 4 月から延長した活動を含めて 2022 年度まで行われた。これは災害支援における緊急対応～復興初期～地域再生という段階に対応する。

## セオリーオブチェンジ

この基金のセオリーオブチェンジを以下のようにまとめた。この基金の活動を振り返ってみると、行政や全国規模の被災地支援組織などの活動と歩調を合わせながら「自然災害からの復興を通じて、住民同士、地域間の助け合った記録、記憶を次世代に伝え、レジリエントで、包摂的な社会を目指していく」ことを目指していたのではないか。地元団体や、住民の自発的支援活動を支えていくことは、決して高額ではないこの助成事業においても十分に可能だと言えるだろう。



## コープ 2018 年北海道地震ボランティア応援基金のプログラム評価

項目	事業開始時の想定	事業実施後から見た考察
事業の必要性	全国規模の被災地支援団体の撤収を見据えて、被災地に拠点を置く団体に助成をする。	金額の多寡によらず、自治の動きを回復する意味でも、必要性はあった。
事業の設計の有効性	発災初期を重視し、段階的に助成額を減らし、コミュニティ活動への小額助成へシフトしていく。	団体アンケートやヒアリングから、想定通り、3年目以降に大きな金額の助成金が必要という声は少なかった。ただ、3年目以降の支援活動自体はあり、それらを支援する想定をした基金は必要である。
事業実施プロセス	公募、助成実施、実施団体サポート、交流会などを実施する計画だった。	むかわ町からの申請が少なかったが、安平、厚真からの申請は相当数あった。コロナ禍の影響による2団体の延長申請には資金提供元である北海道生協連様とも協議したうえで、柔軟に対応できた。団体交流会は厚真町で1回実施できた。
事業の成果	地元団体と住民による復興支援活動の活性化を目指した。	インタビュー記事に、復興支援がどこか遠い世界の話ではなく、もっと自分たちにできることがあったという趣旨の意見が表明されているように、実際の活動の成果ももちろんあるが、地元団体と住民の復旧・復興活動の「関わり代」として有意義だった。

## cope 2018 年北海道地震ボランティア応援基金の助成を振り返って

北海道生活協同組合連合会さまの寄付により総額 900 万円という助成を実施できたことは望外の喜びであり、感謝申し上げます。胆振東部地震では、北海道全域で停電が起きるなど、実際の被害だけでなく精神的にも広範囲にショックを与えるものではなかったかと思います。折しも、東日本大震災の被災者避難者支援助成が終幕を迎えるときに、北海道 NPO ファンドとして新たな被災地支援助成に取り組むことになり、北海道 NPO サポートセンターとともに現地を訪問し、連携を取りながら、助成事業計画を立案していたことが思い出されます。

私たちが力を入れていたのは、現地訪問と助成先団体とのコミュニケーションでした。初年度は現地団体と役場を訪問し、復興支援の状況把握に努め、2 年目には、アンケートとヒアリングを行い、3 年目には交流会を企画しました。アンケートやヒアリングではコロナ禍の影響はあるものの、各々に工夫をされていることが分かり、交流会では厳しい状況の中でも笑顔を忘れないみなさんの姿にこちらも勇気づけられました。

近年は、大規模災害が多発しており、政策的重要性も増し、行政、社協、NPO などによる 3 者連携、場合によっては企業も加えた 4 者連携などの枠組みも定着してきました。また、大手助成財団による被災地支援助成も即応性が高まり、発災直後から支援活動に臨むにあたってのハードルは下がりつつあります。

本基金もそのような流れが進みつつある中で立ち上ったこともあり、この基金としてできることは何かについて、多くの方の助言をいただきました。その一つの答えが、地元団体や住民の復興プロセスへのエンゲージメント(関わり)を高めるというもので、みなさんの報告やインタビュー記事を読むと、この意味では有意義なものであったと感じています。被災地支援をきっかけに他県の方々と交流が始まったり、移住してきた人との関係づくりについて議論したりというときにも、地元側が主体的に動いてきた経験、記憶が大いに活かされるはずです。大きな復興の動きはもちろん大切ですが、誰かがやってくれているだろうと、受け身の姿勢になってしまっては地域コミュニティの自治の機能は弱まってしまう。小規模な地域コミュニティ活動などを想定し、自分の町のことは自分たちでやろうという人たちを応援することの大切さは、今後の助成事業にも活かしていきたいと考えています。

認定 NPO 法人北海道 NPO ファンド理事 高山大祐







笑顔とつながりが

ずっと続していくために

発行:2025年3月

認定 NPO 法人北海道 NPO ファンド

〒064-0808 札幌市中央区南8条西2丁目 5-74 市民活動プラザ星園 201

☎011-200-0973 / ☐npofund@npo-hokkaido.org